
全力少女と災難体質

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全力少女と災難体質

【Nコード】

N2331BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

「あなたの願いはなんですか？」

高校三年生の主人公朝宮悠希は夢に破れ傷ついた心を癒すために懐かしい故郷である御影町へと帰ってきた。しかし、とある一人の少女との出会が災難に巻き込まれる原因となる。

少女の名前は咲山梨花。悠希が通うことになる御影高校ではその名を知らないものはいないとまで言われる天才にして天災、ついたあだ名が全力少女というまるで台風のような少女だった。

ひょんなことから悠希は梨花に付回されることになるのだが、次第にその距離を縮めていくことによって彼女の秘密を知ることになる。そして、彼女の秘密を知った悠希はとある決断をする……
願いの叶う町、御影町を舞台に高校三年生の主人公が高校生活という小さな世界の中で苦悩し時には友人達と衝突しながらも必死に生きようとする再生ラブストーリー！。

夢の中で……

「あなたの願いはなんですか？」

願い、それは人が思うこうあって欲しいと思う事柄、変化、または願望。

人の願いなど、人の数だけあり、またその内容も千差万別だ。お金持ちになりたい、人より優れた人物になりたい、といったわかりやすい欲望ともとれるものや、昔別れた両親に会いたい、あの人との恋を实らせたい、などの叶にくい願いなど様々だ。

ただ、この世界はそんな全ての願いが叶うようには出来ていない。叶う人は叶うし、叶わないものはいくら願っても叶わない。そんな理不尽な世界。

しかし、願いの叶った人全てが幸せかというとそうでもなかったりする。本当に理不尽な世界だ。

願いを叶えるためには、対価が必要になってくる。もちろん、その願いが大きければ大きいほど必要な対価もそれに見合った大きなものになる。

だが、対価を払っても叶わない願いもある。星の数ほどもあるのだ。それでも、人は願うことをやめようとは決してしない。願うことは人にとっては、生きるための希望でもあるのだ。

この世界は、とてもとても理不尽な世界、それでも人は願うことを諦めない。

……………願いの先にあるものを信じて。

「あなたの願いはなんですか？」

落ちゆく世界の中で彼が聞いたのはその声だった。

妙な浮遊感と急激な重力、それらを一身に感じながら彼は屋上から飛び降りた。いや、飛び降りたというのは正しい表現ではない。

その証拠に、少年の胸元にはすでに気を失っている少女の姿があった。彼は屋上から落ちた少女を助けるために共に屋上から飛び降りたのだ。

そんな中で聞こえた声、しかし、その声はすでに気を失っている少女のものではない。

けれど、直接頭に響いてくる声、

なんだこんなときに?! と思いつつも声は再び頭の中に響いてくる。

「あなたの願いはなんですか?」

長い間空中に漂っているせいで、方向感覚までもがわからなくなってくる。現実かそれとも幻かわからないがその姿は確かにそこにあった。

「朝宮悠希、あなたの願いはなんですか?」

上下逆転した姿でその者は問う。同じように落ちている。いや、そこだけ時間や空間といったものを切り取ったかのようにそれはそこにいる。それもその場に静止した状態のまま、

そのナニカが現れた瞬間、彼らの体は急激に浮遊感や重力を失い、その場にとどまろうとする。巨大な水あめの中に二人揃って放り込まれたら身動きが出来ない、そんな感覚。

落ちていくことも這い上がることも出来ない。ただ唯一、許されるのはその場にとどまることだけ。それでも、体が自由に動かせるわけではなく、せいぜい、体の体勢を整えることぐらいしか出来なかった。

彼らをわずかの間だけ生きること許したその人間かも理解し難いナニカは若い女性の姿をしていた。その姿はどこかで見たような姿をしていたが、生憎と悠希にはそんな特定の女性というものはない。しかし、妙に懐かしい、そんな気持ちにさせる不思議な魅力があった。

自身が落下していることを忘れそうになる。切り取られた世界の中でも胸の中で気を失っている少女は相変わらずの様子で目を閉じ

たまま開くことはない。

「あなたの願いはなんですか？」

なおもしつこく問う女性は、言葉とは反面に何故か悲しそうな表情を浮かべている。そんな彼女の言葉に悠希は考える素振りを見せるが、残念ながらこの状況でそんな余裕はない。

「僕の……、願い？」

「そう、あなたの願い」

呆けた様子で問い返す悠希に、目の前の彼女は悲しい顔を浮かべながらも彼に問う。

「思い出して、あなたがここにいる意味を」

「ここにいる意味？どういうことだ？」

彼女は悠希の問いに答えず、ただ彼と胸の中で眠る少女だけを見据えていた。そんな彼女に悠希は何も言えずにいた。ここにいる意味？そんなことを考えたことすらない。

ただ普通に生きて普通に死んでいく。僕の人生なんてそんなものだと思っていた。

そう、ただそれだけの話だったはずだ。

彼はそれ以上何も求めない。しかし、彼女は悠希にここにいる意味を求める。

「僕は……、僕は……」

なぜここにいるのだろうか、わからない。

そんな漠然とした思いが胸の中にこみ上げる。屋上から落ちて自身の人生などあとわずかという中でまさか自身の意味を問われるなど想像すらしなかった。何のために生きて何のために死んでいくのか、

この世に生まれて十七年、そんなに長くは生きてはいないが世の中のことは少しはわかるつもりではいる。それでも、この小さいはずの世界は彼にとっては大きすぎた。自分のことすら完全には理解してはいないのに、世界の全てを知ろうということが間違いなのだ。

「う……………ん……………」

胸の中にいる少女がむずがるように声を上げる。

「……………意味か……………」

少女を見ながらふと思う。きっと僕のいる意味はこれなのだろう。もちろん、確証など無い。ただ、そう思った。

彼女は悲しい顔から優しい微笑みに変わると自身の意味を悟った悠希を褒めるように言った。その鈴のような響きを持つ声は悠希の心の中にじつくりと染み込んでいく。ぼう、と悠希の中に温かい思いが溢れる。

「僕の意味」

「そう、それがあなたの意味、そして、あなたの願い」

「僕の願い」

自身の意味を悟った時、再び世界が動き出す。ゆっくりと確実に世界は動き出し、彼らは落ちてゆく。

胸に抱えた少女は相変わらず目を開けることはない。けれど、それはどこか安らかな眠りのようにさえ見える。

薄れゆく意識の中でなぜそう思ったのかは彼自身見当もつかない。少なくとも彼が助かりたいとか自身の身の安全を保障するものではなかった。

たった一言、

落ちてゆく世界の中で彼は答えた。

その声は誰かに届いたのかはわからない。少なくとも……………、彼女には届いたはずだ。

これでいいんだ……………、これが僕のいる意味でこれが僕の願いだ。そんなことを思いながら、悠希の意識は遠退いていった。

朝宮悠希の帰郷

「う……ん……」

夢を見ていた。正直、どんな夢だったかはあまり覚えていない。

良い夢か悪い夢かと問われるならば間違いない。後者ではあるのだけれど、ただ、その夢の内容を深く吟味したならば意外にも良い夢なのかもしれない。

「まあ、どっちでもいいけどね」

そんなどうでもいい感想と、まだふわふわと浮いているような感覚に、頭を軽く振り目を覚まそうと意識を集中させる。蕩けそうになる眠気が恋しいが、いつまでも公共の場で寝顔をさらし続けるのもどうかと思い起きることにした。

「ふう……今はどの辺りだろう……」

体を動かすついでに、辺りを確認するように車内を見渡すが、残念ながらこの車内には僕一人しかない。さすがにこんなところで旅行に来る物好きはいないか。そんなことを思いながら大きく伸びをする。

うーん、と、伸びをしたときに思わず声が漏れるが、辺りを気にすることもなく思う存分に体を伸ばす。変な体勢で寝ていたせいか節々が痛い。

長いこと電車で揺られ続けたせいで、いい加減座り心地も悪かった。さすがに三時間も一人で話し相手もなく、座り続けているものもなかなか苦痛だった。そんなことを思いながら風に紛れて何処からか懐かしい潮風の匂いがする事に気づく。

「そういえば、海が近いんだっけ」

しみじみと懐かしい故郷の姿を思い出す。窓の外には青々とした海が広がっていて、小さく見える船が一つの点の様に海をのんびり走っていた。その風景は自分がいた故郷がもうすぐそこにあることを感じさせる。そんな風景を眺めていると、座り心地の悪いイスの

ことなどはすっかり忘れてしまった。

「みんな元気にしてるかな」

二年間、連絡も取っていない友人の姿を思い浮かべる。シロは元気だろうか、カズはきつと美人になっているだろうか。きつと詩音も大きくなっているよな。そういえば今年から高校生か。などと、ぼんやりと考えながら外を眺める。

「あなたの願いは何ですか？」

頭の中で響く声にふと我にかえる。この町を出るときに聞いたあの声が再び聞こえた。

ガタン、ガタンと、聞こえる単調な電車の音。今、この車両には僕しか乗っていない。だから、僕に話しかけてくる人物も残念ながない。しかし、それでも聞こえる声。誰かが僕に問いかけるようなそんな声。その声は鈴のような響きを持ちながらもどこか寂しそうな音色を持つ声。

「僕の願い……」

願い。それは何なのだろう。この町を出るときははっきりとした目的は持っていた。でも、今はどうだろうか？ そんな漠然とした事を考えていると、駅員の単調なアナウンスが目的の場所を知らせた。

「次は御影町、御影町」

ようやく着いた故郷が見えてくると、先程の疑問はいつの間にか霧のように霧散していた。

電車が完全に停車するのを待って、誰もいないホームに降りる。

当然ながら、この駅に降りる人間は僕しかいなかった。

電車のドアが閉まる音と、閉まるその様が僕の夢へと続く扉に見える、それが完全に閉じてしまったのを物語っているように見えた。

もう、終わったんだ。これで、僕の夢は完全に潰えた。

後ろを振り返らないって決めたはずなのに、未だに引きずっている。そんな気持ち嫌でこの場所に帰ってきたはずなのに……。

「もう……終わったことだ」

まるで自分に言い聞かせるように呟く。そうすることで新しい自分と出会える気がしたから。

今まで、自分を運んでくれていた電車を見送り、誰もいない改札口へと目指す。向こうにいたときは自動改札が普通だったから、こんな誰もいない改札口というか無人の駅が無性に新鮮に見えた。

少し古びたポスターと時代とともに風化した駅。潮風の匂いと気持ちばかりの春の陽気が僕を迎えてくれた。

久しぶりに帰ってきた故郷の空気を思い切り肺に吸い込む。春の香りが体中に染み渡り、振り返ると青い海と少し冷たい風が心地よかった。

「変わってないなあ」

故郷に帰ってきたの第一声がこれだ。もう少しまともな感想があるだろうと、自分自身に苦笑する。でも、本当に感動した時などは声など出ないものだ。

海沿いの駅から見える町並みは僕が去ったあとあまり変わってはいないようだった。まだ咲くには少しばかり早い桜と、その合間に沿って造られた家屋、そしてその場所に息づく人々。町は坂の傾斜に沿って造られていて、春にこの街の展望台からこの町を見渡すと桜の絨毯と青々とした海が一望できる。御影町それがこの町の名前だ。

新しい学校の転入手続きの事もあったから、まだ春休みのこの時期に帰ってきた。反対する親を説得し、最後の一年くらいはやはり心許せる友人たちと過ごしたい、そんな思いを胸に抱きながら今ここにいる。

だが、目的はそれだけではない。僕にはもう一つ叶えたい願いがあった。ただ、それは、どんなに願っても叶わないかもしれない願いだ。それでも僕は、一縷の望みを持ってこの町に帰ってきた。

「少し、考えすぎかな。僕のこの町での生活はまだ始まってすらいないんだし」

自身で思った下らない不安を一蹴すると、目の前に見える町並み

に染まるように歩き出した。

昔と変わらないはずの町は少しずつ変化を見せているようだった。当然だ。僕も成長すれば町も変わっていく。それが当たり前前の事のはずなのにひどく寂しく思えた。しかし、その中にあることも変わらないものがあることに気づく。小さい頃によく遊んだ公園や、小銭を握り締めて通った古びた駄菓子屋、懐かしき母校、細い路地裏、そのすべてが僕がここにいた証に見え、自分の存在を証明しているかのように思える。

感傷に浸りたい思いに駆られたが、僕はそこまで人生を達観するほど長生きはしていない。まだまだ知らない事の方が多いし、これから変わったり、作られたり、失くなっていく物の方が圧倒的に多い。だから、まだ感傷には浸ってなんかいられないのだ。

小さな頃歩いた桜並木を見上げながら、自分の足跡を辿る。今はここにいる。だから、今はそれだけでいい。

ふと、立ち止まったそばから、海から吹く風に煽られ木々がなびく。まるで、僕の思いに反応しているような気分だ。

ゆっくりと目を閉じる。昔、描いた思いが僕の中に去来する。

あの子のはにかんだ笑顔、少し怒ったときに見せる頬を膨らませた子供っぽい表情、時々遠くを見つめてため息を漏らす寂しそうな表情、不意に見せる大人っぽい表情、そのどれも忘れたことは一度だってない。

あの子の顔を思い出して、懐かしい記憶に触れ自然と笑みがこぼれる。

「……僕は君に伝えるために戻ってきたんだ」

そんなことを口にした直後だった。

ビキンツと、体に電流を流されたような痛みが走る。

「な、なんで!？」

気のせいだ。本当はそう思ったかったが、体は正直なようで心臓がドクン、ドクン、と激しく脈打つのがわかる。閉じていた目を開け周囲を確認するが、残念ながら何も無い。

やはり、気のせいかな？ そう思い首を傾げながら歩こうとするが、その場から歩くことが出来ない。

「何かあるのか？」

自分に言い聞かせるように呟く。当然ながら、その問いに答えてくれる者などいない。

体中の感覚が鋭敏になっていく。体がこの反応を示すときは大抵、ろくなことには遭わない。最初はこの反応に戸惑いもあったが、さすがに慣れた。むしろ、この体のおかげでここにいることが出来ていると言っても過言ではない。

なんだ、一体何が起きる？

そんな不安とある種の期待の入り混じった感想を抱きつつ、その事態を静観する。

ふいに視線を感じ慌ててその方へと向き直る。ふわりと、黒髪を風になびかせながら一人の少女がこちらを見ていた。

「君は……」

まさか、そんなはずは……。

動悸がさらに増していくのがわかる。体の体温がそれに呼応するように高まっていく。

あの長く艶めく黒髪、二つの大きな双眸、雪のように白い肌、触れれば途端に壊れてしまいそうな華奢な体、そのいずれもが先ほど僕が思い描いていたあの子と同じ姿形をしてそこに立っていた。

一刻も早く駆け出したい。君の顔をもっと見たい。向かい合って君の声を聞きたい。

思い描いた夢と現実が重なっていく。

どれだけこの時を望んだか。

どれだけ君の事を考えていたか。

どれだけ…… どれだけか。思いを募らせても、叶わないと思っていた。だけど、君はそこにいる。だから僕は君に会いに戻ってきた。

動け、動け、強く、強く、

そんな思いと共に、より強く動けと念じる。

一步踏み出す。やっとパドックから開放された競走馬のように一目散に少女へと駆け寄る。

会えた、やっと会えた。二年間もずっとこの時を待ち望んでいた。予想以上に早い願いの成就に、少しの戸惑いを覚えつつも僕の心は最高に高まっていた。

しかし、対する少女の態度は僕の予想したものとは違い、とても冷やかなものだった。

こちらに向かってくる変質者を見るような目で顔を歪めると、僕と同じ方向を向いて走り出した。

「ちょ、ちよつと待って!!」

慌てて声をかけるが少女は一目散に逃げる。僕は逃げる少女にさらに加速度をつけて走る。側から見れば、完全に変質者が少女を追い掛け回している構図になっているものの、今の僕にそこまで考えている余裕などない。

二年間ずっと思ってきた願いが今、叶おうとしている。それだけで頭の中は一杯だった。

それにしても逃げる少女の足の速いこと速いこと。男子高校生であるはずの僕が追いつがるのに必死になっている。手を伸ばせば届く距離にあるのに、また……僕の思いは届かないのか……。

いや、届く! だから手を伸ばせ! 掴め!僕は君に伝えたいことがたくさんあるんだ。心の中でもう一人の自分が叫ぶ。けれども目の前を走る少女はそんな僕の心中とは正反対の反応で「あんな何なの!?!」なんで私を追いかけてくるの!?!」必死になって逃げ惑っていた。

「僕は君に会いに来たんだ! ずっとずっと会いたかった!!」
自分でも明らかに変質者のような口ぶりだなにやらとんでもないことを口走っている気もしないではないが、それ以上に彼女を求める思いが上回っていた。ずっと走り回っているせいで、息が上がってくる。呼吸に空気がかすれる音が混じりだす。現役でいたときはもう少し走り回ってもこの程度問題なかったのだが、やはり時の流

れは恐ろしい。格段に体力が落ちているみたいだった。

少女はなおもペースを落とすことなく走っていたが、それでも、やはり僕のほうに分があった。

必死の体で彼女に追いつくと、全力で振り続けているその手を掴む。

「ちよつと待ってくれ！！ 僕は君に話が

「何すんのよ！ 離せ、この変つ態っ！」

見た目どおり華奢な感触が伝わってくるが、この体のどこにそんな力があるのだろうか少女はそう言って掴まれていないほうの腕で僕を掴み返すと、勢いもそのままに宙へと放り投げる。

突然の状況に頭が追いついていかない。

グラリ、ふわり、ドスンッ！ アクシデント三段活用な感じできれいに地面へと叩きつけられる。

一体、何が起こった？ 状況を推測しようにも頭が回らない。地面に体を打ちつけた衝撃と痛みの方が強く、考えようとすることを強制的に排除する。

「か……………は……………」

漏れ出そうとする空気を押さえ込もうとするが、衝撃に対するダメージのほうが大きくそれを許さない。体が不気味に痙攣するのがわかる。自分が投げ飛ばされたのだと気づくには時間がかった。それ程までに僕のダメージは深刻だった。

「く……………がぁ……………な、なんで……………」

「な、なんなのよ……………あんだ……………」

なんなのだとはいつつが言いたい。もしかして覚えていないのか？ 僕の中にそんな不安がよぎる。踵を返すように少女は僕に背を向ける。その姿を見て僕は必死に引き止めようとするが、激しく体を打ちつけた衝撃のせいで言葉が出ない。

「ま、待って……………くれ、僕は……………」

かろうじて残っていた空気を総動員してかすれた声を吐き出す。 やつと……………やつと……………会えたのに。また叶わないのか？ 僕の願

いは……。

遠退く意識と戦いながら彼女をその場に留めようとするが、その声が届くはずもなく、少女はその場から立ち去り、僕は一人春の陽気の中、地面に這いつくばりながら意識を失った。

懐かしき友人達との再会

「……キ……ユキ」

誰だろう、僕の名前を呼ぶ声がする。懐かしい、どこかで聞いた声だ。

「ユキ……ユキ！」

でも、もういいんだ。疲れたよ……少しだけ寝かせてくれ。やっぱり僕の願いは叶わないんだ。

諦めにも似た思いが僕の中に沸きあがり、全てのことから目を遠ざけようとする。けれど、僕を呼ぶ声はそれを許してはくれない。相変わらず声は僕を呼び続けて止むことは無い。

聞こえているのに聞こえない振りをしてその声が聞こえなくなるのを待つ。しかし、その声が止む事は決してなくそれどころか……、
「……ユキ、起きろ！」

その優しく響いていた声は、唐突に怒声へと変化した。その突然の変化に思わずビクリと竦んでしまう。気づけば太陽は僕の真上にその顔を覗かせていた。

「あ……」

ぼんやりと目に映ったものを見て僕は拍子抜けしたというべきかなかなかにして情けない声を出していた。

「……一体、君はここで何をしているのだ？」

声の主は半ば呆れたような口調で僕に話す。一瞬、誰か判断がつかなかったが、この独特の口調を聞けば懐かしい思い出とともに、全てが思い出された。

「カズ……カズなのか？」

「……正直、こんな道の端で寝ているような者を友人と呼ぶべきかは判断がつかぬが、紛れもなく朝宮悠希、君の友人だ」

カズは少しの溜め息と、苦笑いを織り交ぜたなんと形容しがたい表情で僕の名を呼んだ。

二年振りに会った友人は、僕の知っている友人とは少し変わり、ずいぶんと大人びた印象に変わっていた。彼女の名は柊一葉^{ひいらぎかずは}、愛称はカズ、彼女の名前が一葉だからカズというわけだ。もともと、武道を嗜んでいるせいか凜とした雰囲気纏っているカズだが、その雰囲気は今も変わってなくて頭の上で結い上げた髪がより一層その姿を際立たせている。例えるならば日本美人、大和撫子とは彼女のような女性のことを指すのだろう。ちなみに僕は悠希^{ゆうき}だからユキと呼ばれている。

「カズ、久しぶりだね」

「……ああ、確かに久しぶりだな。しかし再開するにしてももう少し場所は考えて欲しかったものだな。まさか、二年ぶりに友人に再会したと思ったらその友人が道端で倒れているところに遭遇するなんてな。お爺様が懐かしい風が吹いたと言うから、きつと君だろうと見に来たのだがこんな所で何をやっているのだ？ 昼寝をするにしても、もう少し場所を選ぶべきだと思うぞ」

「昼寝じゃないんだけど……まあ……色々と事情があつてね」

その言葉に僕は言い返すことなどとても出来なかった。知り合いだと思つて人違いな少女を追い掛け回した末に、あっさりと投げ飛ばされて、気を失っていたなどと、笑い話でも避けたいところだ。言葉を濁す僕になにか察するところがあつたのか、カズはそれ以上詮索することなく話題を切り替えることにしたようだった。

「こんな所でもなんだ、少し歩くか？」

スツと手を差し出すカズはにこやかに笑いながら言った。僕は力ズに手を引かれ立ち上がると、体中についた埃を払う。そして傍らに置いたままにした、もとい、落ちていたカバンを掴みその場を後にした。

御影町の中腹にある桜並木を二人並んで歩く。桜並木といつてもまだ桜の咲いていないこの時期ではそれを感じるには少し時を待たなければならなかった。

「しかし、いつ戻つたのだ？ まさかあんなところで行き倒れてい

るから最初は驚きと焦りを感じたぞ」

「……それはもう言わないでよ。実はついさつき戻ってきたんだ」
「まったく、君はこの町を離れるときもそうだったが、何でも突然すぎるぞ。あの時私たちがどれほど心配したか、二年も連絡をよこさず……」

カズはそこまで言っただけ黙り込んでしまった。僕は自分の事ばかり考えて行動してきたが、みんながこんなにも僕のことを心配していたくれたことが何よりも嬉しかった。

「ごめん。でも、もうどこにも行かないから」

「そうか、ならばいいのだ。それはそうと、君の話していた目的とやらは無事果たせたのだな。でないと君がここにいる理由にはならないからな」

「……………」

「どうしたのだ？」

即答しない僕にカズが不安そうな顔を浮かべこちらを見ている。

「……夢は……失った」

「……すまない、辛いことを聞いてしまった」

「謝らなくてもいいよ。別にカズが気にするようなことじゃないし、ただ単に僕の力不足だっただけなんだからさ。それに夢はいくらでも見られる。叶わないことに対して考え込んでいるよりもまた別の目的を持った方がはるかに理想的だよ」

「……君はそれでいいのか？」

「それでも構わない。そう決めたからこの町に帰ってきたんだ」

本当は嘘だ。そんなことを思っただけなんかない。そんな風に割り切れるほど僕は大人ではないし、ずっと叶えたい願いだっただけ。中途半端な気持ちでやってきたわけではないことも十分にわかっている。それでも、叶わない。この世界はやっぱり理不尽に出来ている。

僕の言葉にカズは納得のいかない顔を浮かべていたが「君がそう言うならば私もそれ以上は何も言わないでおこう」と、呟いてにこやかな表情をこちらに向けた。

「さて、湿っぽい話はここまでにしよう。君はこれからどうするのだ？」

「そうだね。実はこれから二人のところに挨拶に行こうかと思っただけだから、カズの予定さえよければシロの所に行こうかと思ってるんだけどどうかな？」

「ふむ、それならば都合がいい。私もあのバカに用があつたのだ」

「はは、その様子だとシロは相変わらずなんだね」

「ああ、相変わらずだ」

そう二人してまだ見ぬ友人の事を笑いあつた。気づけば、先ほどまでの重たい雰囲気はなくなっていた。

僕等が歩いていった桜並木の道をさらに展望台のほうへ向かって歩いていく。この辺りまで来ると住宅地ということもあつてか色んな形の家が立ち並んでいた。

「ここは、少し変わったみたいだね。知らない家が増えている」

「最近是这样といった場所に住むのが流行りなのはわかんが、やたらと家が立ち並ぶようになってな。昔よりは幾分、華やかになった気がする」

久々に通る町並みの変化を楽しみながら二人で歩く。こうして歩くと今までは気づきにくかった変化が顕著に感じられる。もちろん、自分が幼かったせいもあつたのだがやはり二年という月日は僕が感慨にふけるには十分な時間だったらしい。

そういつた見知らぬ家が立ち並ぶ中、それはあつた。

「それでもここだけは、変わらずに僕を迎えてくれるんだね」

「そうだな。ここだけだ。昔となんら変わらぬ場所というのは」

そう二人して思う場所それは現代風の家が立ち並ぶ中、その家だけが童話の世界に出てきそうなレンガ造りの家だった。実際に使うのかどうかはわからないが、煙突までついている。周りの家との協調性を持たない一風変わった家だった。

横にいたカズが、馴れた手つきでその家の呼び鈴を鳴らす。すると、家の中から「はい」という声が聞こえ扉が開く。そして、そ

の家の家主は僕とカズの顔を見てとても驚いた声をあげた。

「あれ、一葉さん、と……ゆ、悠希さん!？」

「久しぶり、詩音」

「お兄ちゃん！ 悠希さん！ 悠希さんだよ！」

詩音と呼ばれた少女は、僕の姿を認めるともう一人の家主の下へと走っていった。彼女が家の奥に入っていった数秒後……ドタドタと、騒がしい物音を立てながらもう一人の家主が顔を現した。

「ユキ、ユキなのか!？」

「久しぶり、シロ」

「うおおおい！ ユキー！」

久々の再開がよほどうれしいのか、助走をつけてこちらへと走っていく。その瞬間、嫌な予感を感じた。

走ってくるシロ。それを見つめる詩音。ぎよっとするカズ。そして、なにがあっても対処できるようにと身構える僕。

「ユキー、ひいーさあーしいーぶうーりーだああー！」

助走をつけた勢いのまま、こちらに向かってダイビングしてくるシロ。もちろん、これも予想通りだ。

世界全体がゆっくりと動くような感触に陥り、飛び込んでくるシロを見つめながらにやりと笑ってみせる。

「甘いよ、シロ」

瞬時に判断して僕はそれをかわす。しかし、僕の背後には……、

「な、カズ！」

「え、カズ!？」

カズが存在までは計算に入れていなかった。シロが僕の背後にいるカズに気づく。カズも急に目の前に現れた変態を認識するが、対処する暇もなく、そのままだれ込むようにシロとカズは地面へと倒れこんだ。

「きゃ　　!！」と、多分、僕の十七年間の人生でもそうそう聞いたことのないカズの悲鳴が閑静な住宅街に響く。傍から見れば痴漢の現行犯に立ち会った風にさえ見えただろう。

「い、痛てて、なんだ？　　っておう！！」

シロが倒れた姿勢のまま、状況を把握する。飛び込んだ先は力ズのふくよかというべきか、地面に倒れこんでもなお、その形をはつきりとさせている胸に顔をうずめる形になっていた。

人間エアバッグ……。

ふと、そんな感想が脳裏をよぎるが、この状況でそんなことを口にしようものならシロに引き続き第二の犠牲者決定だろう。この後のことを考えるとシロに対してはお別れの挨拶を告げないといけないのだろうが、この世から旅立つ前にこの世の春を見たんだ。これでイーブンだろう。……それにしても羨ましい。

シロは頭をさすりながらゆっくりと起き上がり、その場から逃れようとする。もちろん、顔面蒼白。次に何が起こるかなんて想像するだけでも恐ろしい。もちろん、事態の張本人であるシロがそれを良く理解しているからこそ逃げようとしているわけなのだが。

「……そ、そーいや、俺宿題やんなきゃ……」

「……待て」

その声は地の底から響くような重厚な響きを持ち、その場に居たものを一瞬にして凍り付かせるには十分な重さがあった。むくりと緩慢な動作で立ち上がった力ズは、特に何かをするわけでもなくただ一点のみを見つめている。蛇に睨まれた蛙の心境のシロはその場から一步も動けずにいた。傍目から見ていた僕と詩音も、これから起きるであろう凄惨な結末を目にしないといけないと思うと、非常に心苦しかった。

「……貴様、どこへ行くこうというのだ？」

「い、いや、その……そうだ事故だ。そう、あれは事故！　不幸な偶然が招いた結果だ！」

「そうか、あれは事故なのか。ならば仕方無いな」

「し、仕方ない、仕方ないよな……は、ははは……」

シロは自分の言い訳が通用したと思っっているのに、顔を引きつらせながらもゆっくりと後ずさりをやめようとはしない。そんな不審

な動きを見せるシロにカズが呟く。

「……貴様、どこへ行こうというのだ？」

「ど、どこも行かね。よ。ほ、ほら互いの誤解も解けたし、ここにいってもなんだからよ、中に入ろうぜ」

シロはそう言いながらもいつでも全力で逃げられるように体勢を整えている。その次の瞬間、カズがにつこりと笑った。何故だろう。その笑顔がとてつもなく怖い。そう、例えるならば終焉という慈悲を与えようとする菩薩のような笑顔だった。

「……詩音、僕たちは先に中に入っていよう」

「え？ あ、そうですね。出来ればお兄ちゃんの最期を見ておきたかったんですけど」

「やめておいたほうがいいと思う。色んな意味でもね」

「詩音！？ 今さらつと恐ろしいことを口にしたよな？ 俺の最期がどうとか……」

「気のせいだよ」

僕は凄惨な光景を目にする前に、詩音を家の中に入れる。教育上問題になりそうなシーンだし。

「一葉さん、先に入って待ってますね」

「ああ、そうしてくれ。さて、と、いつまでも客人を外に出したままというのも悪いだろうからさっさと済ませるか」

「な、何を済ませるって？」

自分の身に明らかな危険を感じ取ったシロは、スタート直前のラッナーの如く身を屈めて逃げようとする。しかし、カズのほうが早かった。それらを機敏に感じ取ったカズはシロの前に先回りすると、首元を掴み自らの眼前に顔を引き寄せた。シロは引きつった顔のまま口を金魚のようにパクパクさせている。それでも、状況から見れば金魚というよりも、俎上の鯉といったほうがしっくりくる。

シロ、来世でまた会おうね。心の中で次の再開を願いながら手を合わせる。

「事故でも責任は取らないとな」

「ひ、ひいひいひいひい！
へぶらあー！」
それが僕たちの聞いたシロの最期の声だった。

再会と邂逅と……

一波乱あったものの、一応に落ち着く。まあ、何名かを除けばだが……。

カズはシロに抱きつかれたことがよほど効いたのか、先ほどからなにやらぶつぶつと言っているし、対するシロは気にした風でもないがカズに思い切り殴られたせいで顔の半分が異様に腫れ上がっていた。残った詩音は、やれやれといった風に溜息をつきそうな表情で自分の兄を見る。色々と妙な感じになっではいるが、僕が過ごした日々が戻ってきたような気がして嬉しく思った。この二年間、色々あったけれどやっと自分の居場所に戻れた。そんな感触。「今、何か持ってきますね」

詩音は客人である僕らに気を使いキッチンへと向かった。「バカな兄とは違いよく出来た妹だ」とはカズの意見だ。実の親友にそういうのはいかなものだろうとは多少なりとも思ったが、こればかりは事実なのだから否定の仕様がなかった。

彼らの名は織田^{おだ}士郎^{じろう}と詩音^{しおん}という。

士郎ことシロとは僕と同年でカズとも小さい頃からの幼馴染だ。外見はとても社交的な好青年といった印象があるがそれは外見だけの話でいつもくだらないことやってはカズに怒られていた。対して妹の詩音は人見知りをしそうな印象があるが、それは外見だけで兄に似てとても人懐っこい。そしてどういうわけかシロより出来がいい。容姿だとかそういった外見的なものではなく内面の方だ。彼らをよく知る者たちは妹にいいところを全て吸収されたのだろうと口を揃えて言うが、詩音は「お兄ちゃんはずいぶん普通だ」と言っていた。もちろん、それは僕だってカズも理解している。しかし、普段の言動のせいでそれが理解されにくいのはとても残念な気もする。

さて、その残念な言動の兄はというと、

「いや、ユキ久しぶりだな。こうして話すのは二年振りになるんだな。元気そうでよかった」

「シロこそ相変わらずだね。変わってない」

「そうか？ 俺は大人の男になるべく、日夜特訓の日々をだな……」

「また、そんなことばかり言っただろうぞ、たいしたものではないですが」

シロが意気揚々と自分の恥をさらす前に妹としてそれを止める。

詩音の気苦労もどうやら相変わらずのようだ。

「それで、二年ぶりに帰ってきたって事はこの町に戻ってくるのか？」

「うん、またこの町に住むことになったからそれで挨拶にと思ってね」

「そっか。ユキ、お前のいないこの町は寂しかったからな。またあの時のように遊べると思うと俺はうれしいぞ」

そう言っただけで立ち上がると、再びこちらに飛び込んでくるのを寸前で制す。横ではカズがびくりと跳ねる。よほどトラウマになったようだ。

「ごほん、……まあそれに関しては私も同感だな」

平静を取り戻したカズがうんうんとうなずきながら同意する。その光景を見ながらなぜか詩音がうれしそうに話す。

「お兄ちゃんいつも悠希さんの話ばかりしていましたからね。だから、先ほどの言動もどうか大目に見てあげてください」

「おう、大目にみてやってくれ」

僕とカズはつくづくシロの妹が詩音でよかったと思った。じゃなかったらきつと後ろから刺しているかもしれないからだ。もちろんそれは冗談だけど。何にせよ、みんなは僕の帰りを待ち望んでいたことはよくわかった。それだけでも僕にとっては、帰ってきてよかったと十分に思える。そんな気がした。

二年間は言葉にしてみると長いように感じる。けれども、それを話に置き換えると以外にもそう長くは感じなかった。むしろ、短く

感じるぐらいにさえ思える。

話の度にユキは変わっていないと口々に言われる。僕にしてみれば、三人とも僕のよく知っているままだと思う。もちろん、変わったこともあるだろうが、それはささいな変化なのかもしれない。これから変わっていくんだ。色々……。

昔話も一区切りついたところで僕はこの町に帰ってきてからずっと気になっていたことを三人に話してみることにした。

「そういえば、聞いたかった事があるんだけどいいかな？」

「おう、なんだ？ カズのスリーサイズなら上から9　ぶごおう！」

ゴスツ、とかなり鈍い音をたて、シロがうずくまる。カズは鬼のような形相でシロのみぞおちに一撃を食らわせたようだ。それにしても、一瞬だけ9と聞こえたがそうになるとカズはなかなかのスタイルの持ち主なのか？ という僕の意見はとりあえず置いておこう。横では詩音が自分の胸元に手をあてて「9……」と、繰り返し呟いていた。詩音のダメージも兄同様深そうだった。

「はあ、はあ……それで何が聞きたいのだ？」

シロは未だ真っ白になったまま動こうとはしなかった。完全にクリティカルヒットだったからしばらくは動けないだろう。ただ、時折「お花畑が……天使が……」と呟きながらビクビク動いているのがとても気持ち悪い。

視界の端に移るびくびくと痙攣をする物体を、華麗に無視することにして話を続ける。

「あ、うん、大したことじゃないんだけど、あの展望台の近くにあった白い屋敷って今でも残っているのかな？」

「君もなかなか妙なものを気にするのだな。あの屋敷のことは君に言われなかったら思い出すこともなかった。もはや、当たり前のようにあるはずなのにな」

「確かに、カズの言うとおりだな。俺もあの辺りはよく行くけどあんまり気にしたことはなかったけど、あつたなそんなもの」

「そっか、まだあるんだね。というか、生きてたんだね」

カズといつの間にか復活していたシロが口々に話す。シロは僕の言葉に「人殺し！」と反論したが完全に無視する。この町の人間にとつてはあまり興味の持つようなものではないのかもしれないが、僕にとつてはこの町に戻ってきた目的がその屋敷なのだ。

「しかし、あの屋敷はすでに人が住んではないし、この町の人間でさえあまり思い出すことのない忘れられた場所のはずだ。だが、どうしてそんな場所を？」

カズが不思議な顔をしながら僕に尋ねてくる。それにはカズだけではなく、シロや詩音までもが興味をもっているようだった。

「うん、ちよつとね」

「なんだよ、隠し事か。水くせーな、話してみろよ」

「隠し事つてわけじゃないんだけど……ね」

「お兄ちゃん、無理に聞いたら悪いよ」

デリカシーに欠ける兄を詩音が嗜める。詩音の気遣いは嬉しかったが、別に隠し事というわけではない。ただ、少し話しにくい話だから言いよどんでしまっただけなのだが……どうやら、二人は僕のことを忘れ普通の兄妹喧嘩に発展してしまった。やれやれ、これでは話そうにも話せなくなってしまった。そんな、当たり前だった光景を眺めながら僕は懐かしい情景を思い浮かべる。あの少女と出会ったあの時を……。

僕があの子と出会ったのは、中学三年生の秋だった。まだ、夢はきつと叶うと信じて前だけを見ていた頃の話だ。

いつものように部活を終えて家に帰る途中に、あの少女と出会ったのだ。あの時のことは今でも覚えている。忘れるはずもない。

当時、僕の住んでいた家はシロやカズの家とは逆の方向で、この町にある展望台を上って少し降りた場所にある住宅地の一画に住んでいた。両親はいつも家にはおらず、家族そろってご飯を食べることはあまりなかった。僕自身も夢のために奮闘していた時期ではあ

つたから、両親の仕事のことがなくても自然とそうになっていたに違いない。

学校が終わり家に帰るときには必ず展望台を通る。僕は毎日見ることが出来る展望台の風景がとても好きだった。朝方の町が起きだす風景や、夕日に照らされオレンジ色に染まる御影町を見るのがいつもの日課になっていた。

ただ、その日だけは少し違っていた。

いつものように夕日に染まる御影町を見て家路に着く僕の目の前を何かが通り過ぎていった。

「……紙飛行機？」

ふわり、ふわりとその紙飛行機は空中を優雅に飛んでいた。もし、この場所が水の中ならば優雅に泳ぐ魚をイメージしていた。

「なんで、紙飛行機が」

目の前に落ちてきた紙飛行機を拾う。何の変哲もないただの紙飛行機、ただ、それは一機だけではないようだった。

「あ、また」

僕が持っている紙飛行機だけではなく、また別の一機が空を飛んでいる。よく見れば、近くの木にも一機引っかかっている。

いったい誰が？

その紙飛行機が飛んできた方向を見るとどうやら住宅地の方から飛んできているのが見えた。そのときの僕は、なぜかこの紙飛行機を飛ばしている人物に無性に会いたくなった。理由などない。ただ、なんとなくだ。

住宅地に向かって歩いていると、また新たな紙飛行機が空を飛んでいた。気がつけば僕は駆け出していた。

少し、息を切らせながら紙飛行機が飛ばされている場所にたどり着く。そこは、僕の家近くにある大きな白い屋敷だった。

その屋敷の二階の窓が開かれていて、そこから、紙飛行機は飛ばされていた。ふっと窓のほうを見る。窓には色の白い少女が立っていた。少女は、ただただ窓の外をじっと眺め、そして紙飛行機を飛

ばしていた。しかし、紙飛行機を飛ばしている少女の顔は楽しそうとか、そんな雰囲気ではなく、憂いに満ちた表情を浮かべていた。じっと見ている視線に気がついたのか、少女が僕に気づいた様子でこちらに向き直る。そして、窓から姿を消した。というよりも、家の中に入っただけでいってしまった。僕が不審者に見えたのだろうか、確かに、じっと見ていれば誰でもそう思うか。

そっとその場を後にしようとしたとき、「待って」と声をかけられる。声の方向へと振り向くと、先ほどの少女が屋敷の玄関に立っていた。

少女は手に紙飛行機を持ったまま、僕の方に近寄ってそして、「それ」と言っただけ僕の方を指差した。

「えっ？」

思わずきょとんとしてしまった。状況がわからない。少女は何に對して指差したのだろう。指差すほうを見てみると、僕の手の中には、先ほどの紙飛行機が握られていた。気づかないうちに持っていたしまったようだ。

「これ？」

僕が持っていた紙飛行機を見せると、少女はこくんとうなずいた。よっぽど大事な何かなのかもしれないと思ったが、よくよく考えてみれば大事な何かならば飛ばすことはないんじゃないか？と言っ結論に至る。

「これは君が飛ばしていたの？」

「……」

少女は何も言わない。ただ、こちらをじっと見つめていた。

よく見れば、少女はとても美しい顔立ちをしていた。肌は陶磁器のように白く、長く伸ばされた髪はとても艶やかな黒髪だ。こちらを見つめる双眸は大きくそれでいて何か惹きつけられる印象を持っていた。

一言でいうなれば、人形のような少女。

しかし、美しい顔立ちなのだが、なぜかその表情は悲しそうに見

える。僕にとつては、なぜ、そんな悲しそうな表情を浮かべているかの方が気になった。

僕は手に持っていた紙飛行機を見つめながら少女に尋ねる。

「これは君のだよな？」

もう一度問いかけると、少女はうなずいてくれた。そして、こう言った。

「願い」

「願い？」

「そう、それは私の願い」

少女が何を言っているのか正直、理解できなかった。すると、少女は不思議そうな顔をしている僕に持っていた紙飛行機を見せた。ただし、紙飛行機になる前の状態だ。

「なるほど、そういうことか」

僕は思わずくりと笑ってしまった。すると、少女は少しむつとしたような表情を浮かべる。へえ、そんな顔も出来るじゃないか。内心、ずっと無表情でありながらもどこか悲しそうな顔をしているのが気になっていたから、違う一面を見れた事が嬉しく思えた。

紙飛行機の中にはこう書いてあった。

“元気になつて自由に外を歩いてみたい”

少女の文字らしく綺麗な筆跡だった。その彼女の願いには強い想いとその願いが成就しにくいものであることがなんとなくだがわかった気がした。僕自身にも叶えたい願いがあるから。だけど、それを叶えるために彼女はあとどれくらいの対価を支払わなければならないのだろうか。

「でも、なんで紙飛行機なんか？」

「紙飛行機に書いて飛ばして、もし、それがあの海まで届いたら私の願いが叶う気がしたから」

二人揃って高台から見える海を見る。

海を見る少女の横顔は先ほどまでの弱々しい表情とは打って変わって、強い意志を秘めた顔つきをしていた。普通に考えたならばそ

んなことは不可能に近い。けれども、もし、風が吹いてその風に乗って海まで届いたら？

もちろん、そんなのは本当に奇跡に近い。しかし、本当に奇跡というものがあるならば……。だから、僕が彼女に対して言う言葉は決まっていた。

「きつと叶うよ」

「え？」

「大丈夫、きつと叶うから」

「……」

僕の言葉に少女は信じられないといった顔をしていた。そんな彼女に僕はにこりと笑った。彼女もそんな僕の表情を見てにこりと笑った。その顔はとても輝いていて素直に綺麗だと感じた。

「あなたがそういうならばきつと叶う気がする。ううん……きつと叶う。きつと」

そして少女は手に持っていた紙飛行機をそつと抱きしめる。心地よい風が僕たちをやさしく包み、そこには二つの笑顔があった。海が近いせいで少し潮の香りがした。

その日から僕は、彼女の話し相手になった。彼女は生まれつき体が弱く、いつも家にいることが多いらしい。そのため、一人で外に出歩くこともなかなか出来ないため、僕がいつも屋敷に訊ねてくれることをとても楽しみにしてくれた。

自分の夢や学校であった出来事、少女は僕の話を聞くたびに、色々な表情を見せた。満面の笑みで笑ったり、信じられないといった表情で驚いたり、感情が豊かなんだな、と少女に話すと彼女の答えはそんなものではなかった。

「私は小さな頃から学校に行けなかったから、あなたの話は聞いていてとても楽しい」

そう言って少女は笑ったが、僕は少女に言ったことを少し後悔していた。軽率だった。こんなことぐらい少し考えれば気づきそうなことなのに。そんな僕の顔を見て考えていることを察したのか、少

女は諭すように言った。

「気にしなくていい。私はあなたが今、ここにいてくれるだけで

笑顔になれるから」

そう言った少女の顔をまともに見れなかった。少女は大して気にしていない様子だった事が余計に恥ずかしく思えた。情けない、一人で何を考えているのやら。そんな、甘い考えを無理やりに押さえ込み、僕と少女の時間は過ぎていった。

そんなある日、いつものように屋敷を訪ねると、少女は一つの提案をしてきた。

「あなたにお願いがある」

「お願い？」

僕の言葉に少女は何も答えなかった。代わりに「ついてきて欲しい」という言葉が返ってきた。

お互いに何も言葉を交わさず、ただただ歩く。僕は手を引かれるままについていくと、そこは御影町の展望台だった。

夕日が僕らを照らし、二人の影を長く伸ばす。その場所だけがくつきりと切り取られたかのように、しんと静まり一切の物音がしなくなる。

辺りには僕たちしかおらず、一切の人影すら見当たらない。

「なんでここに？」

僕の質問に、じつと町のほうを見ていた少女がこちらに振り返る。逆光に照らされた少女はとても輝いて見えた。

振り返りこちらに笑いかける少女、長い髪がそよそよと揺れ、その髪をかきあげる。その姿がとても美しく見え、僕の鼓動が高まる。まるで映画のヒロインみたいだと思った。映画のワンシーンでエンディングも間近のラストシーン。舞台には僕と彼女の二人だけ。

そうして彼女はゆっくりと近づきこう言った。

「私たちの思い出をここに埋めよう」と。

本当に映画のワンシーンみたいだ。実際にそれを体験しているの

だが、現実感がない。

少女は手に持っていた鞆から小さな箱を取り出し僕に見せた。とても凝ったデザインが特徴の箱だった。いや、それは箱というよりはオルゴールのように見えた。

「これは？」

「タイムカプセル」

「タイムカプセル？」

「そう、このタイムカプセルを埋める」

「でも、埋めるってどこに」

少女は少し思案した顔を浮かべる。そして思いついたらしく「ここに埋めよう」と言って展望台にある、一本の桜の木の下の指差した。

展望台には大きな桜の木が立っていて、少女はその桜の木の根元にタイムカプセルを埋めようと言った。確かにここならば忘れることはないだろうし、何かの拍子に取り出せなくなることもないだろう。

そうと決まればあとは穴を掘るだけだ。少女はもともと埋めるつもりで来たのかシャベルなどを持っていても準備がいい。

二人そろって黙々と穴を掘る。まだ初秋ということもあり、穴を掘っていれば自然と汗が出てくる。でも、今はそんなことよりも彼女との思い出を一つでも多く作ることしか考えられなかった。

「私、小さな頃から夢だった。こうして、誰かと歩くこと。色んな話をしたり夢を語ること。そして、こうやってたくさんの思い出を作ること」

少女は穴を掘りながら、自身の思いを語る。

「でも、なんでタイムカプセルを？」

やっとの事で箱を埋められるぐらいの大きな穴を掘った。箱を埋めようかというところで僕はずっと疑問に感じていたことを口にする。

「あなたの願いと、私の願いをここに埋める。そしていつかその願

いが叶ったらその時にこれを掘り出す」

「なるほど、そのためのタイムカプセルか」

「あなたは私の願いは必ず叶うと言ってくれた。だから私は私の願いを叶える。あなたはあなたの願いを叶えて。大丈夫、きつと叶うから」

少女はにこりと微笑み、僕にそう断言した。

きつと叶う、そう信じて……。

こうして、僕たちの願いを込めた箱をそつと穴の中に埋める。これを掘り出すときは、互いの願いが成就したそのときだ。願いが叶うかはわからない。それこそ神のみぞ知ることだろう。もちろん、僕は神なんてものはあまり信じていない。けれど、もし、本当に神様がいるのであれば彼女の願いだけでも叶えて欲しい、そう心から思った。

それから半年後。僕はこの町を離れることになった。急な事だったせいもあり、別れの挨拶はシロとカズ、それと詩音ぐらいにしか出来なかった。

あの日から少女の姿は見えていない。屋敷に行っても、その姿は見つけることが出来なかった。いつもならば、窓際に立って外の風景を眺めているのが日課だった彼女がいなくなっていた。

毎日のように屋敷の前を通り過ぎていたのだが、そのうちの一回も会うことはなかった。ほどなくして、屋敷にいた人間は別の町に引越したことを知った。

最初は別れの挨拶も出来なかったことがとても悲しく思えたが、きつと彼女とはまたあの場所で会える気がした。だから、僕は自分の願いを叶え、再び彼女に会うことを心に誓ったのだ。

この町を離れる日、父親に「この町を離れる前に行きたい所はあるか？」と聞かれ僕は迷わず「海に行きたい」と答えた。

まだ、春にはまだ遠い三月、海から吹く風は冷たく、肌に痛みが走る。たかだか、十五年しか住んでいなかったこの町だが、色々あったと思ひ返す。

真っ先に浮かんだのはあの屋敷の少女の笑顔だった。あの少女は元気にしているだろうか、願いを叶えて今は元気に走り回っているのかもしれない。そんな想像をして一人で笑ってしまった。

横で煙草をふかしていた父親が怪訝そうな顔で見てくる。

「どうした。何かいいことでもあったのか？」

「ううん、ただ、ちよつとね」

「なんだ、感傷に浸るにはまだ早いだろ」

「うん、僕は大丈夫。きつと……また会えるよね」

「何の話だ」

「なんでもない。それじゃ行こうか」

相変わらず父親は不思議そうな顔をしたままだったが、それを気に留めず車のほうへと歩いていく。ふと、頭上に目を向ける。すると、そこには……、

「紙飛行機」

ふわり、ふわりと風に乗って紙飛行機が宙を舞っていた。その光景に僕は心から「おめでとう」と呟く。

“元気になって自由に外を歩いてみたい”

「届いたんだね、願いが」

彼女の紙飛行機は三月の御影町の空を、自由にそれこそ鳥のように飛んでいた。

そして僕は彼女の願いが叶うことを信じてこの町を後にした。

今度は僕の願いを叶えるために……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2331ba/>

全力少女と災難体質

2012年1月10日22時46分発行